山形大学附属博物館報 19

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY　1993. 3. 31

目　次

「尚家継承琉球王朝文化遺産展」に想う …… (1)
「中条家文書」のこと …… (2)
尋ねあぐねた博物館 …… (3)
資料紹介 …… (5)
平成4年度 学芸員実務実習・公開講座・特別展を終えて …… (6)

「尚家継承琉球王朝文化遺産展」に想う

館長　仲野　浩

今年1月5日から2月14日まで龍譚を挟んで首里城跡と向い合う形の位置にある曽ての琉球国王尚氏の別邸跡に建てられた沖縄県立博物館の特別展「尚家継承琉球王朝文化遺産展」を観る機会があった。黒縮緬の表地に12条の幅広い筋状の金糸に，金・銀・水晶・ガラス・珊瑚等の玉を金の鋲で付け飾った「王冠」や，「赤地嶮山龍瑞雲模様繻珍唐衣裳」等の琉球国王の身の廻りの品々のほか，尚家の家紋左三つ巴紋も巧みにデザインした「玉敷」(「玉貫」) とこれと一具をなす金銀器，国王家だけに許された黄色を地色とした，或いは中国的吉祥模様である龍・鳳凰を配した尚家を特徴付ける紅型衣裳，品格ある「黄色紗地石畳文単衣」，家紋左三つ巴紋と桜花を交互に散らした「白木綿地三つ巴丸小花散らし模様紅型単衣」等の琉球の香り一杯の衣裳類，精細な技巧を凝らした琉球独得の技法による箱・盆等の漆工品，格調高い壺屋焼の「色絵紅葉文風炉」等の陶磁器，刀剣，そして，首里城正殿の再建の参考史料の一つとなった「百浦添普請絵図帳」「百浦添普請日記」等の絵図・日記類，慶長14 (1609) 年の島津侵攻の際，尚寧王の身近に従った喜安入道の「喜安日記」(写本)，「戊戌冊封諸宴演戯故事」「大清同治五年丙寅冠船躍奉行小禄按司日記 全」等の芸能関係の史料，「異国日記」その他58件の貴重な尚家文書――合計110件207点の超一級の文化財が展示された。

尚家・尚財団は，今回展示された以外にも，多くの文化財を所有しておられるという。これらの多くは修復を必要とする関係上，展示できなかったそうであるが，こうした文化財を戦火から守ってこられた尚家の努力・苦労は並大抵なものではなかったと思われ，ただただ頭を垂れるだけである。私は，尚裕氏と十回程お会いしているが，関東大震災と第二次世界大戦で，東京或いは沖縄で保存・管理されていたであろう尚家の財宝は，全部灰燼に帰したものと思い込み，尚氏からお話を伺うこともなかったし，また，私の仕事とも関係ないことであった。それだけに，今回の展示品を目の当りにした時の私の驚きは，尋常一様なものではなかった。日本と琉球，日本文化と琉球文化……そんなことがあらためて頭の中を駆け廻った。

20年この方，よく沖縄県を訪れる機会があって，何十回となく沖縄のあちこちの島の土を踏んでいるが，その度毎に，われわれ本土に住んでいる人間は，琉球・沖縄のことをどう理解し，考えているのだろうと自問する。守礼門の前でカメラにおさまっている人々，首里城跡を訪れる人，南部の戦争遺跡を見て廻る人，ショッピングに余念がない人たち……みんな沖縄を“日本の中の沖縄”或いは“日本の一地方”として沖縄の土を踏んでいるのか，“日本と沖縄は同文同種”と考えながら歩いているのか，難しいことでなくとも，何となく違う日本だなあぐらいは感じているだろう。そ

れもその筈，不思議に思うことの一つは，小学校・中学校・高等学校の歴史の教科書で，なぜ琉球・沖縄県や北海道のことがまともに扱われないんだろうかと。中学校の歴史の教科書では，室町時代の倭寇あたりで，幕末の対外関係で，沖縄県の設置（琉球処分）を明治初年の外交の一部で，そして第二次世界大戦の記述の一部で，各々多くて数行程度，それも前後の記述からすれば，やや唐突な感じで記されているだけというのが多い。教科書の検定基準では，これでよいわけであるが，心が晴れない。私も教科書の編集・記述に30年程携っていたが，十数年前に，二度程，四分の一改訂の際，窮屈を浚ぎながら，琉球・沖縄県と北海道の歴史の流れを各々２ページずつ，上記の記述とは別に挿入したことがあった。日本の南と北の二つの地域は，明らかに本土の歩み，歴史の流れとは違っている。どう違うのか，ここでは言及しないが，文化の様相も相異する。それらの違いの大凡は，国民皆が教わる権利があるし，知っておかなければならないことである。両地の生徒は，副読本等で当然教わっているであろうが，問題は本土の生徒たちである。この歴史教育の歪みは，一年も早く是正しなければならない。“戦後は終った”というのならば。

さて，尚裕氏は，昨年，琉球王国第二尚氏王朝家の陵墓である重要文化財・史跡玉陵（たまうどん），歴代崇廟の重要文化財崇元寺石門・石牆，尚家邸宅の名園で名勝に指定されている識名園（しきなえん）の３件の土地・建物等一切を，無償で那覇市に寄付された。感無量である。高良倉吉（たからくらよし）氏は，話題を巻き起している新著「琉球王国」（岩波書店―新書）の「もち去られた王朝文化遺産」の頃で，「1609年春に……薩摩軍は，10日間にわたって（首里）城内の宝物を略奪し，戦利品として鹿児島にもち帰った。1879（明治12）年に王国を廃して沖縄県を設置した明治国家は，首里城内に保管されていた膨大な文書類を接収して東京に運んだ……。王国の崩壊により…首里の旧エリート層……(の)家宝……は本土市場に出まわった。また，沖縄戦に勝利したアメリカの軍人たちは，焼失を免れた文化財を大量に沖縄からもち出している。」と記し，王朝時代の粋を凝らした文化遺産の県外流出を嘆いておられる。まったく同感である。尚家の文化遺産だけではなく，琉球を，沖縄を説く歴史遺産の一点でも多くが，いつも沖縄の地で，県民に，そして国民みんなの眼に時折ふれる日の訪れることを祈念している。

（病院の窓ごしに雪のちらつくのを眺めながら）

（教養部　教授）

「中条家文書」のこと

湯　山　賢　一

現在，国・公・私立大学に於て，博物館乃至博物館相当施設をもつところは以外と少ないようである。ましてや，総合博物館的なものとなると，自づからその数は限定されてくる。大学附属博物館の場合は，自大学生の博物館学芸員養成課程のための施設としての側面も大きく，山形大学附属博物館も，恐らくこのような必要性の中から発展して，今に至ったものと推察される。しかし，こうした大学附属博物館における活動は，一般の博物館に比較して，予算や人員上の制約もあり，資料の蒐集ひとつをとっても，担当教官の多大な御苦労の程が偲ばれる。筆者も長年にわたり国の文化財保護行政の一端に携わった者として，こうした館施設の様々な文化財を看る折にふれて，思うところである。

たまたま，一昨年の十月，山形大学附属図書館所蔵になる「中条家文書」二百三十三通を，国の重要文化財に指定するための事前調査に伺う機会を得た。山形大学の場合は博物館が図書館の三階にあり，いわば，博物館の母屋が図書館の様な関係で，調査期間中は，当時の館長でいらした横山教授を始め，石沢事務長以下の図書館の皆様に大変お世話になり，どちらかというと，附属博物館よりも，むしろ図書館の方に馴染がある。しかし，中条家文書自体は，内容・意味合からみても，図書館資料というよりは，本来的には古文書史料として，博物館資料たる性格のものであるから，この紙面を借りて，簡単にふれてみることとしたい。因に中条家文書は平成四年六月付で国の重要文化財となっている。

この文書を伝えた中条家は，中世越後国奥山庄に盤踞した三浦和田一族の惣領たる家柄であった。拠点となった奥山庄地頭職は，建久三年（1192）十月，源頼朝より和田義茂の弟宗実へ安堵され，以後，義茂の子高井重茂，その妻津村尼へと相伝された。嘉禎四年（1238）に家督を相続した高井

時茂（道円）の代に奥山庄の経営が本格化し，地頭請所化にも成功する。道円は奥山庄を中条・南条・北条に分け，これを嫡孫茂連以下義基・茂長の三人の孫に譲与し，惣領中条・南条・関沢・北条黒川を各々惣領とする鼎立体制が成立していった。茂連は再び和田を称し，鎌倉時代後期には，所領の分割相続に伴う相論によって，一族内部の対立も深刻さを増すが，やがて所領の分割制限や，惣領の庶子に対する統制を強めて，その家臣化を促進し，寛正年間（1460～ 5）朝資の代に中条氏を名乗るようになって，同族の黒川氏とともに揚北（阿賀野川以北）の有力国人領主へと成長する。戦国期上杉氏の領国下に於ては外様として自立した存在であったが，慶長三年（1598）上杉景勝の会津移封に伴って，のち米沢に転じ，上杉家臣として明治維新を迎えた。

本文書はこうした中条氏の歴史を反映して鎌倉から室町時代を中心に，所領の分割譲与に関する譲状や，これに対する幕府の安堵状或は所領相論関係文書がまとまっていて，東国に於ける惣領制の実態と，庶子被官化を前提とする嫡子単独相続制への移行などを明らかにして，領主制研究上に著名な文書である。

図版の建久三年十月廿一日和田宗実充の将軍家政所下文は，源頼朝が同年七月の征夷大将軍就任後，これまでの袖判下文を将軍家政所下文形式に改めた時期の文書として注目される。頼朝は将軍就任を契機に，これ迄の袖判下文召返して，改めて政所下文を給付しようとした。しかし，『吾妻鏡』にみる千葉常胤の逸話のように，御家人の間では政所下文のような家司の署名のみで，頼朝の花押のない文書では後代の證拠とはなし難いとして，従来通りの頼朝御判の下文の給付を願うものが少なくなかった。そこで，希望する者に対しては政所下文とともに，同日付で袖判下文を併せ給付することとした。現在，その慣例としては小山朝政充の両通が知られているが，本文書はそれのほぼ一月後のもので，しかもそれと同一祐筆の手になる文書として興味深い史料である。

中条家文書は江戸時代にはすべて未表装のままに伝来したが，後期に至り，その大部分に裏打が施されると共に，その大きさや，まくり，未表具巻子などの形態別に単純分類されていたようである。やがて，明治時代に伊佐早謙氏の手によって整理がなされ，現状の各文書の右上辺にある釈文注記を付した貼紙は，同氏の手になるもので，本文書理解の一助ともなっている。

中条家文書は，その一部が「越後奥山庄波月條絵図」（重文，中条町役場）や「越後文書宝翰集」（重文）などに分かれたが，その大部分は本家中条敦氏の手によって，昭和四十七年に山形大学へ譲与されたものである。雑駁な紹介で恐縮であるが，貴重な文書の購入を計られた関係者の皆様の御努力に敬意を表しつつ筆を擱くこととする。

（文化庁主任文化財調査官）

尋ねあぐねた博物館

渡　部　俊　三

故人になられた元農学部長の土屋先生は，海外出張の折りによく博物館を尋ねられたようで，その自慢話を聞かされたことがあるし，本誌にもその記事を残しておられる。

私も少しばかり海外を歩いたものの，なかなか各国の博物館めぐりという程の余裕がなく，今にして思えば残念至極である。それでもエジプト，アフガニスタン，中国など，旅行目的にあわせて，多少，博物館を尋ねてはいる。

しかし，残っている印象はおぼろげで，今，詳しくそれを披露できない。どこの国も博物館は恐ろしく広く，ところ所に警備員が立っていたことは覚えている。そんな程度で甚だ頼りないのだが，ただ，ねらいをつけた「物探し」の記憶だけは鮮明に残っている。

例えばカイロ市にあるエジプト国立博物館では，ベニバナや紅染めの展示物を探して館内を歩き回ったのだが，紅の痕跡すら見つけることができず，

案内人と警備員を間違えて怒られたりした。息苦しい館内でヘトヘトになって，ふと目をやると，古代の人形の口元に褪せた朱色を見つけたが，紅ではなく顔料のようで，遥かめざして来たのにとがっかりしたものだった。これとは逆に，カブール市にあるアフガニスタン国立博物館では，さすが東西文化の十字路といわれるだけあって，期待もしていなかった紅染めらしき壁掛けなどが所蔵されており，東洋的でしかも西洋風な仏頭にも出会うことができた。

北京の故宮博物館は，日本語の上手な河北大学の先生が案内人だったせいか，まるで日本にいるような感じで，次から次へと説明を聞いたが，紅やベニバナに関したものは見当たらず，余りの広さと大きさに飲み込まれそうであった。

さて，一方，国内の博物館については，私は殆ど目的を持って尋ねたことがない。何時でも行けるからという気持ちもあったし，それよりも何よりも，探し求める目標を持たなかったからであろう。ところが，物臭な私を急に博物館行きに駆り立てる事態が昨年起こった（というほどのことでもないのだが……）。

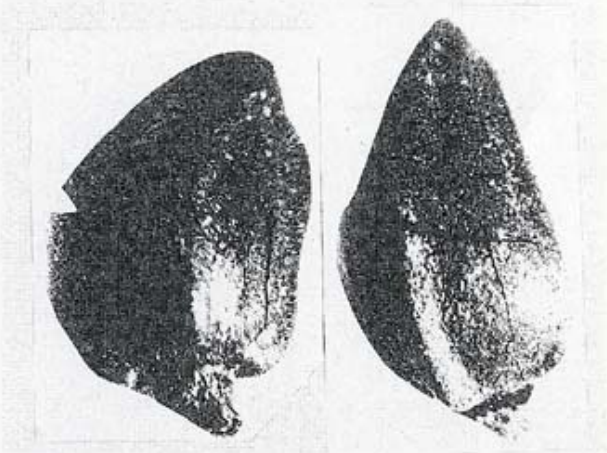
順序立て話すとこうである。「ほかにも北海道の古代遺跡からはいろいろな種類の栽培植物が出土している。その一つが，天塩の豊富遺跡から出土したベニバナである。原報告ではソバとされていたが，みんなで手分けして調べているうちに，ベニバナと判明した」。これは，北大文学部吉崎昌一教授の「アイヌ文化と農耕」と題した特集記事（平成４年度文部省重点領域研究　５）の中の一節である。この日本民族起源論の中で，北方民族南下説につながる記事はひどく私を興奮させた。

この資料を私に届けてくれたのは，北大出身で吉崎先生のことをご存じの有永教授（農学部・森林資源学）である。失礼をかえりみず，先ず吉崎教授に手紙を書いた。日を置かずに幾つかの論文が送られてきた。それを読んで私の好奇心は募るばかり。ぜひ現物を見たいと思う。だが，なかなか北海道行きの都合がつかない。

今年はあきらめようかと思っていた矢先，朗報が舞い込む。北海道在住の卒業生から同窓会にきてほしいという案内である。このチャンスを逃す手はないと，旅支度を整えているところに吉崎教授から，先般お願いしてあった文献が送られてきた。

有り難やとばかり封を切ると，出てきた吉崎教授の手紙には次のようなことがしたためられていた。「ご要望の文献を同封します。しかし，出土した旭川博物館蔵のベニバナ種子は私たちの手もとには１個も有りません。実物は現在でも同博物館に30粒くらい保管されており，お申し出になれば，観察ならば可能かもしれません。当初，旭川博物館に関係していた考古学者が，この種子をソバ扱いしていたのを，G.クロフォード（カナダの考古学者）と私が，撮影した資料を長いことかかってベニバナらしいとつきとめ，詳細に検討報告したい旨連絡したところ，すげなく断わられたいきさつがあります。時として無理解からおきる行き違いなのでしょう。考古学の世界ではしばしば発生するつまらない事故だと思います」。

私は夏休みに札幌まで行ったものの，とうとう旭川市立郷土博物館には行かずじまいであった。尋ねあぐねたのである。有名な吉崎教授ですら門前払いを食うとあっては，素人の私などがノコノコ出かけて行っても，とても歯が立つまいと思ってのことであった。



北海道豊富遺跡から出土したベニバナ種子

文献によれば，発掘時は百粒以上あったという。それが60粒となり，現在は30粒位というのだから，密かに持ち出されて，どこかで誰かの研究材料になっているのかもしれない。

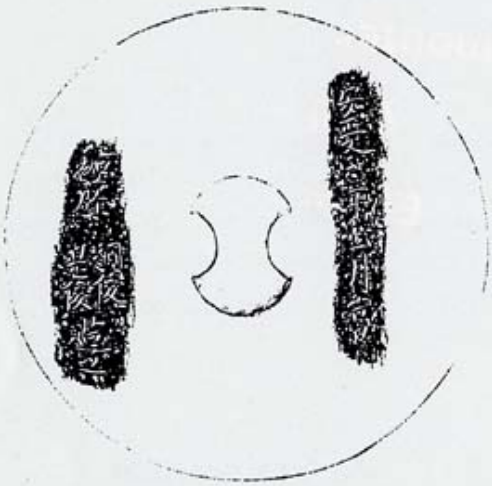
暗い気持ちでいるうちに晩秋になってしまった。国体選手の付き添いで来たという旭川市出身の卒業生にこのことを話した。市の職員である彼は，「私が何とかしますよ」といって帰ったのだが，未だ何の連絡もない。恐らく彼も考古学的事故に遭ったのであろう。すまないことをしたと思っている。

目的のない博物館には，やっぱり足は向かない。それにしても吉崎教授が送って下さった市立旭川郷土博物館報告は立派である。地方の一博物館でこれだけの研究がなされていることを思うと，本学の附属博物館には調査研究の面で，予算と実績が伴うような何らかの措置が，ぜひ必要なように思われてならない。　　（農学部　教授）

資　料　紹　介

刀工が造った鏡

本資料は，直径が130㎜，厚さが最大3.8㎜，最小２㎜の不均等な，円形をした鉄製の鏡である。



「和鏡」鏡背面の拓本

鏡背面中央には紐を通す分銅形の鈕が鎔接されている。鈕の右側に「安政六年三月吉日」，左側に「加藤綱俊・是俊造之」と銘が切ってある。

この鏡の製作者である加藤綱俊・是俊父子は江戸時代末期の米沢出身の刀工であり，共に江戸麻布に住した。綱俊は寛政９（1797）年から文久３（1863）年の間に生存した人物で，米沢藩のお抱え刀工加藤国秀の子息である。ちなみに，この国秀は郷土山形の生んだ巨匠水心子正秀（山形藩秋元家お抱え刀工）の門人であるから，綱俊は水心子伝を受け継いだことになる。彼は初め「長運斎」と号したが，後にこの号を子の是俊に譲り，自らは「長寿斎」と号した。綱俊は備前伝の丁字乱れを得意とし，新々刀期（おおむね安永頃から明治時代まで）の刀工として高い評価を得ている。本館所蔵の弘化２（1845）年紀の綱俊作脇差にも，備前伝の丁字乱れを見せて上手である。

一方，是俊は綱俊の子息で天保６（1835）年に生まれ明治28（1895）年に没した。初銘は是俊，その後父綱俊から「長運斎」の号を譲り受け，父の没後は綱俊を襲名し二代目となった。是俊は綱俊同様備前伝の丁字乱れを焼いたが，互の目が目立つ作品を多く残している。

さて，本資料は次のような興味ある特徴を持つ鏡である。第一は，刀工が造った鏡であるということ。第二は，鍛造法を用いているということ。第三は，鉄製円鏡であるということ。以上の三点である。

第一点に関して言えば，綱俊・是俊父子はあくまで歴とした刀工であった。江戸時代にはすでに職業が細分化し，鏡は鏡師，刀は刀工，鐔は鐔工，鎧は甲冑師というように，それぞれを専門とする職人がいた。例外的に，幕末から明治にかけての名工栗原信秀のように鏡師から刀工になった者もいるが，刀工が専門外の鏡を造ったこと自体がきわめて珍しいことである。

第二点は鏡の製造法である。江戸時代まで使用されていた金属性の鏡は，鋳造法という，鋳型に鎔かした金属を注入する技法によって造られている。しかし，本資料はこの鋳造法ではなく，鍛造法を用いている。これは，金属に熱を加えて柔らかくし，槌で打ち，延展，曲折させて形成する技法である。そのため，銘のある鏡背面には，鍛造の跡を示す槌の打痕が研磨仕上げを施さない状態のまま残っている。両技法を比較すると，鋳造法は鋳型を用いるために同笵のものの量産が可能になる。事実，江戸時代後期には鏡が広く庶民に普及するようになったのである。一方，鍛造法は一枚一枚を槌で鍛えて造るので，鋳造法に比べ量産には向かない。本資料に見る鍛鉄造は，鏡の製造法としては一般的でないと言える。

第三点は鏡の素材と形である。鏡と言えば，現在私達が想像するものはガラス製の様々な形をした鏡であるが，江戸時代までの鏡はほとんどが銅製であった。また形は，室町時代までは六稜形・八稜形のものも多少はあるが，円形が圧倒的に多く，鏡背面に鈕を付け，様々な美しい文様を鋳出していた。ところが，江戸時代になると，円鏡に持ち手を付けた形の柄鏡が広く普及するようになった。そのために鈕が不要となり，背面にはより

一層制約のない自由な文様が表現されるようになった。そして円鏡は，例えば神社の御神鏡か，婚礼調度品のような蓬莱鏡に限定されるようになった。このように柄鏡が主流の中にあって，本資料は円形で，しかも背面に銘を切っただけの簡素な造りであり，特異な印象を与えるものである。

以上，本資料は素材，形，製法，製作者の全ての点から言って，他の現存品と大きく異なっている。つまり，それは刀工が鉄を鍛えて制作した珍しい鏡なのである。おそらく，造刀後に残った玉鋼を利用して，「試み」に制作した鏡ではないだろうか。

最後に，この小稿を成すにあたり，布施幸一氏から御指導・御教示をいただきましたことをここに記して，感謝の意を表わします。

平成４年度 学芸員実務実習・公開講座・特別展を終えて

今年度，当館で実施した学芸員実務実習に参加した学生の総数は107名。予定していた２回に分けての実習では指導しきれず，３回に分けての実習となった。期間・学部別の内訳は下表のとおりである。

	人文学部	理学部	教育学部	計
第１回 7.27～7.31	22	12	10	44
第２回 8.25～8.31	16	12	9	37
第３回 10.5～10.9	15	9	2	26
計	53	33	21	107

公開講座「花と文化」は36名の受講者を集め，右記の講師及び講義科目で開講された。

講師及び講義科目

回 月日	講義科目	時間	官職氏名
第１回 9月19日	開講式		
	紅花の民族植物誌	90分	農学部教授 渡部俊三
	紅花の流通と文化	〃	教育学部教授 横山昭男
第２回 9月26日	花の美しさについて	〃	農学部助教授 鈴木洋
	花の文化史	〃	人文学部助教授 菊池仁
第３回 10月３日	花の生態	〃	理学部教授 安部守
	花の歳時記	〃	名誉教授 山形理
第４回 10月17日	花粉と環境	〃	教養部教授 山野井徹
	〃	〃	〃
	終了式		

特別展は，公開講座「花と文化」の延長として，講座の内容を資料を用いて広く一般に紹介したもので，平成４年11月９日(月)～20日(金)までの10日間，附属図書館会議室を会場に開催され，連日，学生や一般市民の方々の見学でにぎわった。

平成３年度見学者総数

一般成人	個人	534（人）
	団体	131
大学生	個人	410
	団体	194
児童生徒	個人	16
	団体	112
合計	個人	960
	団体	436
	総数	1,396

山形大学附属博物館報 №19 1993．3．31発行
編集兼発行人 山形大学附属博物館
（〒990） 山形市小白川町１丁目４－12
☎0236－31－1421（内）2921